



World End
Chronicle
Before you betray the world
Story by Shimono Osukai
Art by Isegawa Yasutaka

霜野おつかい
イラスト イセ川ヤスタカ

君が裏切る前に

特別試読版 ep3

GA文庫

相反する少年少女が
世界を再構築する
ヒロイックファンタジー!

世界を救うため、
彼女と手を取り合い戦え

私が世界を
滅ぼす前に、
どうか私を
救って
ちょうだい

三章

暗殺にはうつつつけの夜に

World End Chronicle
Before you betray the world

時刻は真夜中。

冴^さえ冴^ざえと輝く満月が見下ろすのは、都からすこし離れた場所にある閑静な別荘地である。

海を見渡す高台に広がるその一角は、かつては国内外の富豪がバカンスに訪れ、ずいぶん賑^{にぎ}わいをみせていたという。

だが、十年ほど前にほとんどの建物が売却され、どれも買い手のつかないままゴーストタウンと化してしまっていた。

唯一明かりが灯^{とも}つているのは、区画の奥にたたずむ一軒のみだ。

高い塀がぐるりと四方を取り囲み、その内側に広がるのはよく手入れされた庭である。

そしてその中央には純白の豪邸がそびえていた。三階建てのその建物はかなり立派なもので、ひと目見るだけで高い身分の者の居宅だとわかるだろう。

今、その上空に……ひとつの影が飛来した。

夜闇^{よやみ}を切り裂くように飛ぶのは、コウモリのような羽を備えたクロウだ。

音もなく屋根へと着地して、小さくため息をこぼす。

その瞬間、羽は瞬時にしぼんで足元の影と化した。

これにて不法侵入の完了である。

「本当便利なもんだよなあ……影導魔術。やっぱり剣よりこつち教えてもらって正解だったな」

こぼした独り言を、冷たい夜風がさらっていく。
師匠たるトリスからは、剣の手ほどきを受けたこともあつたのだが……。

彼女の基準は英雄イオンだ。

枝一本でドラゴンを倒すような剣技などとうてい身につくはずもなく、結局魔術一本に絞って教えを乞うことにした。今となつては懐かしい思い出である。

「ま……こんなことに使うことになるとは思わなかったけどな」

屋根の上から見回せば、正門や庭のあちこちに武器を構えたメイドたちが立っていた。

どれも同じ顔を有した彼女たちは、微動だにせず闇の中の監視を続ける。

魔道人形が守るここは……災厄王女、リインの屋敷だ。そのことをあらためて実感し、クロウはもう一度、重い息を吐く。

こんな夜中に彼女の屋敷を訪れる理由なんて、決まっている。

もちろん、暗殺だ。

サクラがリインの護衛になると申し出て、今日で三日目。

結局あれから話は滞ることなく順調に進んでいた。
サクラは誰だれがなんと説得しようと思いを曲げず、逆にやる気を燃やすばかりだった。

『もう、みんな姫様を誤解しすぎだよ。魔神の呪のろいはたしかに怖いものかもしれないけど……姫様はそれにひとりで耐えてるんだから！ 支えてあげたいって思うのは当然じゃない！』

『ああ、うん、そうだな……』
そう語る彼女に、クロウは生返事をするので精いっぱいだった。

まるで過去の自分を見ているようだった。昔の自分もそうやってリインを庇かばい、サクラにおかしな顔をされた

のをよく覚えていいる。今となつては完全に黒歴史だが。ともかく、明日からはサクラがリインの護衛となる。このままでは彼女がクロウのかわりとなつて、リインの悪事に手を貸してしまふかもしれない。

「それだけは、なんとしても阻止しなさいけないな……」

グローブの上から、あの指輪を握りしめる。

あいかわらず反応はないものの……決意がより強固なものになる気がした。

そこで、ふとした疑問が脳裏のうりをよぎる。

（未来のあいつは……なんでこれを、俺おれなんかに渡したんだらう？）

これまでなるべく考えないようにしていた疑問だ。なぜなら、どれだけ考えても答えにたどり着ける気がしなかったからだ。

「償いだの、なんだの言っていたが……いや」
かぶりを振って思考の深みから浮上して、あらためて状況を整理する。

トリスは急な仕事が入ったため、朝まで戻らないことは調べがついている。

ここの使用人は魔道人形ばかりで、今夜あの屋敷にいる人間はリインのみ。

暗殺には、うってつけの夜だった。

「今は……とにかく行動あるのみだ」

ちいさくうなずいて、クローウは足音を立てないように注意しながら屋根を歩く。

目的の場所は三階の角部屋だ。

テラスに降りて窓から覗けば、月明かりのもと、ぼんやりと部屋の様子が見て取れる。

大きなクローゼットに花瓶や、化粧台、ぬいぐるみ等々。見るからに女性の部屋といったインテリアの奥には、天蓋付きのベッドがあつた。

そこには人影がひとつ。ここからでは顔はよく見えな
いが……長い金の髪が、洞窟で息をひそめる金貨のよう
にきらきらと輝いていた。

持ってきた針金でカギをいじること数秒。

あっさり窓は開き、クロウは音もなく部屋の中へとすべりこむ。

件の^{くだん}ベッドを覗きこめば――。

「ううん……」

しみひとつないシーツの上で、リインがもぞもぞと寝返りを打つ。

オフショルダーの薄い寝巻の下には、豊かに育った^{したい}肢体がかすかに透けて、純金を溶かしたような長い髪が波紋のようにシーツの海に広がっている。

柔らかかな月明りが彼女の肌を照らし出し、さらにその白さを^{きわだ}際立たせていた。

美しくも安らかな少女の寝顔。



しかし、クロウはそれに見惚みほれることはない。
用意しておいたナイフを懐ふところから取り出して、小さく吐息をこぼす。

都の中古武器屋で投げ売りされていた、大量生産の安物だ。

たとえ傷口の形から凶器が特定されたとしても、それがクロウにつながることはない。そもそも第三者の視点から見て、自分にリインを殺害する動機などありえないのだ。誰もクロウを疑うことはないだろう。

災厄王女が何者かに殺害されたとなれば、きつと大騒ぎになるはずだ。

サクラも悲しむかもしれない。だが……きつとすぐに

元通りの平穏が戻ってくる。

この国が壊滅し、世界までもが滅ぶ運命は除去される。
(リイン……俺はたしかに、一度はおまえを愛したよ)
すこし目をつぶり、心を静める。

かつての歴史で、彼女と過ごした日々^はに思いを馳せる。
人生で初めてできた恋人だった。毎日彼女と言葉を交
わし、触れ合うだけで幸せだった。

あの三年間だけを切り取ればとても美しい思い出だ。
それだけはクロウも認めていた。

だが、脳裏に浮かぶのは未来の記憶だ。

崩壊した王国。各地に広がる戦火。終わりを迎える世
界。

それらが決意に薪まきをくべ、制御不能なまでに燃え上がらせる。

クロウは目をかつと見開いて――。

（俺は……おまえを殺して、世界を救う！）

にぎりしめた刃を、わずかな躊躇ちゆうちよもなく、彼女の心臓めがけて振り下ろした。

飛び散る真紅がシーツを染め、生々しい鉄錆てつさびの臭いが夜気を染める。

少女の生命は失われ、これですべての未来が救われる。そうなる、はずだった。

――否いな。その蛮刃ばんじんは、届くこと能あたわず。

刃先が彼女の皮膚を貫く寸前。

クロウの頭の中に、誰のものとも知れない女の声が響いた。

「は、ぐ……あああああああああああああ
あ!？」

獣のような咆哮ほうこうが夜闇を切り裂く。

最初、クロウはそれがリインの断末魔だんまつまだと思った。

しかし刹那せつなののちに、その悲鳴が自分ののどの奥から放たれていることに気付くのだ。

（なっ、なんだこれは……!? 頭がっ……頭が、割れる
……!）

立ったていでいられないほどの壮絶な頭痛がクロウを襲う。たとえるなら頭の中に何万本もの針を埋め込まれたかのような、まさに常軌を逸した痛みだった。あまりの苦痛に涙が止まらず呼吸もできない。

そのうち吐き気までこみあげてきて、クロウは床に倒れてのたうち回る。

「いっつ………あれ？」

しかし突然、その痛みが嘘うそのようになくなった。

頭を抱えてしばし警戒するが、頭痛が戻ってくることはない。

体調いっさいにも問題はなく、めまいや動悸どうきといったものも一切いっさいなかった。

「えええええ……なんだ今、の……」

「……」

体を起こして言葉を失う。

いつの間にか部屋の明かりがついていて、リインが上半身を起こして固まっていた。

ぽかんと目を丸くする彼女と、クロウはしっかりと目が合ってしまった。

たしかに、あれだけ騒げば危篤きとくの老人だって飛び起きることだろう。

「あなた……なんで、ここに……?」

「えっ、あっ、その……!」

まずい。すばやく言い訳を考える。

トリスに呼ばれたから。時間を間違えたから。夜這い
に来たから。

どれもこれも納得してもらええると思えないし、最後の
は特に最悪だ。

（ええい……！　　いっそもう、騒がれる前に殺るしか
……って、あれ!?）

いつの間にか、用意したはずの凶器が手元から消えて
いた。

凍り付くクロウ。

それに、リインはますます眉を寄せろのだが――。

「ちよつと、なにか言いな……っ！」

そこでリインの形相が引きつった。

彼女の視線は床へと注^{そそ}がれていて……そこに転^{そそ}がって
いたのは、ひと振りのナイフ。

彼女のまなじりが一気につり上がり、唇からは血の気
が失せる。

その表情をクロウはよく知っていた。なにしろ未来の
世界で鏡を見れば、いつでもそれはそこにあつた。それ
はまぎれもなく、復讐^{ふくしゅう}者の面相だ。

クロウの背中に得体のしれない悪寒^{おかん}が奔^{はし}る。そして――。
「あなたまさか……十年後の、クロウ・ガーランドね!?!」
「……は?」

その言葉の意味をたしかめるより先に。
視界いっぱい、白い光が煌^{きら}めいた。

ドガアツ！

「なにつ……!?」

気付いたときには、クロウは瓦礫がれきとともに宙を舞っていた。

あわてて身をよじり、転がるようにして着地する。そこは屋敷の裏手に広がる裏庭だった。

見上げた先に飛び込んでくるのは、半壊したリインの部屋だ。壁は綺麗きれいに失せていて、中が丸見えになっただ。もうもうと上がる土煙が、威力のすさまじさを物語る。

（いやいやいや!? なんの威力だよ！ あいつは魔術なんて使えるはずないだろ!?）

火薬の臭いは一切しない。

ならば目の前の現象を説明するのは魔術以外にありえないのだが……彼女は魔神の呪いのせいで、魔術の類を使えないはず。

それにまだ謎は残る。先ほど頭の中で響いた声と、謎の頭痛。

そして……彼女が発した気になる言葉。

（十年後……たしかにあいつ、言ったよな）
生唾を飲みこむクロウの目の前に、リインが軽やかに降り立った。

寝巻に身を包んだ小柄な少女。

しかしその険しい相貌からは、百獣の王といった風格

ばかりが漂っていた。

彼女はクローウが落としたナイフをしかと握りしめ、皮肉げに口角を歪^{ゆが}めてみせる。

「妙だと思っただのよね……この時代のあなたは、あんなに強くなかったはずだし。でもまさかそっちから尻尾^{しっぽ}を出してくれるとは思わなかったわ」

「まさか、おまえも……十年後から戻って来たっていうのか!？」

「はあ……？　なにわかり切ったこと言ってるのよ。当たり前前じゃない」

リインは目をすがめて鼻を鳴らす。

「ふんっ。前の歴史通り、護衛にしてから殺そうと思っ

てたけど……まさかそっちから出向いてくれるなんて
ね！」

その瞬間、湿った風が吹きつけてあたりの緑がざわつ
いた。

リインは人差し指をこちらに向けて、鮮烈に吠^ほえる。

「あなたが十年後のクロウなら、今ここで相打ちになっ
てでも殺してやるわ！ 覚悟なさい！」

「……え？」

クロウはその殺気に、ぽかんとするばかりだった。

目の前にいるのが未来から戻ってきたリインなら、間
違いなく討^うつべき敵だ。

だが……強烈な違和感がクロウの闘志を鈍らせるのだ。

(えっと……こいつ、いったい何を怒っているんだ?)
被害者はこちらの方だし、怒りを向けられる筋合いはないはずだ。

そもそもクロウに指輪を託して過去へと送ったのは、ほかならぬ彼女だったはず。

同じ十年後から戻ってきたのなら、クロウの秘密をそもそも知っているはずではないのか。

彼女の語る言葉はどれもしつくりこなかつた。

しかしリインはますますまなじりをつり上げていく。
そうして放つ宣言は……まさに天地がひっくり返るようなものだった。

「あなたを殺して……私は破滅の未来を救ってみせる！」

この国のみんなの仇を、必ず討つてやるんだから！」
 「……は？」

相手が殺気全開なものも忘れ、クロウはたつぷり十秒ほど固まった。

……今、いろいろと妙な単語が聞こえた気がする。
 聞き間違いだろう。きつとそうに違いない。

おそるおそるラインに尋ねてみるのだが――。

「仇つて……誰が、なんの？」

「今さらとぼけるつもり!? クロウ・ガーランド！」
 リインは威勢よく、もう一度叫ぶのだ。

「聖遺物を奪つて、この国を滅ぼした重罪人！ その挙
 句に世界まで滅ぼした……史上最悪の裏切者め！」

「はああああああああああああああああ!!」
クロウののどの奥から、えげつない絶叫ほじほじが迸る。
おかげであたりの木の上で休んでいた鳥が一齐にバタ
バタと飛び立った。

国を滅ぼした重罪人？

史上最悪の裏切り者？

どれもなじみ深い単語である。

しかしそれは決して……クロウとイコールで結ばれる
ようなものではない！

「ちよっ、待て！ それはいったい何の話だ!？」

「はあ!? みなまで言わないとわからないわけ!?! だつ
たらいいわよー！ 教えてやろうじゃない！ あなたは

未来の世界で私の護衛になって、こっ、恋人になって……！」

恋人、という単語に顔をかあつと赤く染めてみせる。そんな姿は可愛らしいふつうの女の子と言っているのだが……。

「私を利用して聖遺物を盗みだして……最終的にこの国を滅ぼしたんでしようが！」

「んなもん知らねえよ!？」

もはや一戦交えるどころの話ではない。

暗殺しに忍び込んだことも忘れてクロウは声を張り上げる。

「おまえマジで何言ってるんだ！　そもそも聖遺物を盗ん

だのは——」

「うるさいうるさいうるさーい！ 人の恋心を弄んでっ
 ……さぞかしい気分だったでしょうねえ！」

ラインの声は怒りで震えている。

こちらの言葉に耳を貸す気は毛頭ないらしい。

彼女を中心にして風が渦を巻く。

明らかかな異変に、クロウが身構えるなか——。

「私をこんな時代に飛ばしたのも、なにか企みがあつて
 のことなんでしよう！ いいかげんに白状して……みじ
 めに無残に死になさい！」

「うおっ!？」

クロウが身をかがめたすぐ真上を、強烈な風が薙ぎ払

った。

次の瞬間、背後の大木が斜めにずれて切り倒され、ものしい地響きが轟く。とどろく

おかげでクロウはひゅっと短く息をのむのだ。

リインはただ、その場でナイフを揮っただけ。ふるまるで魔術の所業である。

「どういことだよ……!? おまえ、魔術は使えないはずだろ!?!」

「ええそうよ! この呪いのおかげでね!」
リインが受けている魔神の呪いは、周囲のマナをかき乱す。

その結果として彼女はあらゆる魔術が効かないし、使

えない……はずなのだ。

「でも、私はトリスのもとで、必死に修行を積んだのよ！ その、結果……！」

「っ……！」

数メートルの距離を一瞬で詰め、ラインがすぐ目の前に躍り出る。

達人級の瞬歩だ。予備動作は一切察知できなかつた。刹那、彼女の振り上げる刃先に、かすかな光が宿つて

――。

「光刃流奥義薙ぎの型一番――《天斬》！」

刃先が虚空を薙ぎ払う。クロウの身体にはかすりもしない。

それなのに、立っていた空間を不可視の巨刃が断ち割った。

轟音ごうおんとともにあたりの植え込みがズタズタに切り裂かれ、色濃い砂塵さじんが舞い上がる。

「くっ……！」

そのすぐ後方、数メートルほどの場所にクロウは着地する。

手足に宿るのは白い光だ。白魔術の一種、《強化》エンリッチ。

身体能力を一時的に増幅することのできる呪文じゅもんである。とっさに飛びのき回避したが、完全に避よけきることはできなかつた。

左腕が浅く切り裂かれ、生ぬるい鮮血がしたたり落ち

る。クロウの背筋が凍り付くが、それは痛みのせいばかりではない。

「こ、光刃流って……まさか、英雄イオンの!？」

「ええそうよ！ 偉大なご先祖様が編み出した剣術よ！」

リインの先祖であり、魔神を倒した英雄イオン。

彼は枝きれ一本でドラゴンを仕留めるほどの腕利きだ

ったという。

脳裏に蘇るよみがえるのは、かつて師匠であるトリスと交わした言葉だ。

あるとき英雄イオンの話になり、彼女は苦笑を浮かべてみせた。

『世間一般じゃ、あいつは剣の達人として知られているけど……正しくは、剣技の達人だったんだよなあ』
それは、どちらも同じ意味なのでは。

クロウがそう問いかければ、トリスは肩をすくめて。
『全然違うよ。あいつが極めたのは技きわそのもの。やつの剣技はすさまじくてね。世界の因果をねじ曲げて、常識では考えられないような結果を残すものだった』

いわく。

一太刀ひとたちが千にも、万にも、那由他なゆたの斬撃ざんげきにも匹敵ひつてきし。

距離や防備、相手の力量、その他どのような条件にもかかわらず刃が届き。

形があるものならば、どんなものでも光よりも早く斬き

つてみせたという。

ゆえに、光刃流。

しんらばんしやう 森羅万象を断ち切る無敵の剣技なり。

『だからあいつはどんな得物えものだろうと万夫不当ばんぷふとうの戦いができたんだ。なまくらだろうと枝切れだろうと……光刃流の前じゃ紙切れにも等しいのさ』

あときは大げさに語っているのだとばかり思っていた。

だがしかし――。

「これが私の最終兵器！ わかったのなら……今すぐ死

ね！ あまきり 《天斬》！」

「うわっ!?!」

クロウが身をかがめたすぐ真上を、ナイフが裂く。
刃はやはり虚空を薙ぐだけで、ただ無軌道に振り回し
ているだけに見える。

だがあたりの木々が木っ端みじんにはじけ飛び、大地
には数多の斬撃が刻まれていく。

地響きが起こるほどの轟音に肝きもが冷え、クロウは悟る。
トリスの言葉は誇張でもなんでもなく……まぎれもな
く真実だったと。

「ええい、くそっ……！」

精霊魔術・第五階かいてい梯……

《フリージングプレリユード永久なる眠りの凍奏曲》！

刃をひるがえ翻すラインに向けて、こっそり唱えておいた魔術
をぶちかます。

先日、ドラゴンを凍らせた絶対零度の光線だ。

だが空から放たれたそれは、リインを打ち据える寸前で光の粒子となつて消えてしまふ。

「忘れたわけ!? 私に魔術が効くもんですかっ!」

「ただの確認だよ! やっぱりこうなるよなあ!」

こちらからの攻撃は無効化されるくせに、向こうからは矢継ぎ早に超強力な斬撃が飛んでくる。ワンサイドゲームもいいところだった。

(つつつても、対抗手段がないわけでもないんだが……!)

彼女を殺す切り札なら存在する。

だがしかし、クロウは躊躇ちゆうちゆうを覚えるのだ。

こちらをにらみつけるリインの目には、薄い涙の膜が

張っ
てい
てー
ー。

「もうあんな悲劇は起こさせない！ この国も、世界も、滅ぼさせやしない！ 私が絶対にあなたを倒して……未
来を、変えてやるんだから！」

夜空を切り裂くような切なる慟哭どうこく。

それは自分が吐露したかと錯覚するほどに、一字一句、クロウの思いそのままだった。

（ああもう……！ 意味はわかんねーけど……ともかく今はやるしかない！）

クロウはぐつと拳こぶしをにぎりしめ、足に力をこめる。

ここで取るべき行動などひとつだけだった。力強く地面けを蹴る。

「なっ……逃げる気!? そうはいくもんですか!」
 リインの叫び声を背中にして、その場から脱兎だつとのごとく駆け出した。

なるべく開けた場所を目掛けて、一直線に。
 走りながら、ちらりと背後を振り返れば――。

「光刃流奥義……断ちの型三番」

リインは元いた場所に、凜然りんぜんと立っていた。

目を閉じ、肩の力を抜き、微動だにせずたたずむ様は、まるで枯れ木のよう。

だがしかし周囲の空気がひりつき始めていることをク
 ロウはたしかに感じとった。

指先ひとつ、髪の本にいたるまでが洗練され、ぞっ



とするほどの神気をまとっていく。

（来る……！）

直感したその瞬間、彼女はカッと目を見開く。

「《土龍伏々鬼》！」

「っ……!?」

地面にナイフを突き立てたその刹那。

稲妻のような閃光せんこうが大地を奔り、轟音とともに土砂を

巻き上げ爆はぜ飛んだ。

もうもうと立ち込める砂埃。それが晴れた後には……

底が見えないほどの深い地割れが庭園のただ中に刻みつけられていた。

クロウの姿はどこにもなく、完全に崩壊した庭園には

動く影などどこにもない。

リインはその光景を前にして、ガッツポーズを取りかけるのだが……。

「やったわ！ これでようやくー」

「動くな」

「っ……！」

そんな彼女の首筋に、クロウは影の腕を突きつけた。

影導魔術第一階梯——シャドローアーツ《投影》。

未来の世界で彼女に届かなかったその技が、わずか数ミリの距離まで肉薄している。クロウがすこしその怪腕を動かせば、彼女の首からは噴水のような血が噴き出すことだろう。

背後に立つクロウに、リインは目をみはる。

「な、なんで……あなた、地割れに落ちたはずじゃ……
!？」

「あいにくこうしてぴんぴんしてるさ」

幽霊でも見るかのような彼女に、クロウは嘲笑を浮か
ちようしよう
べてみせる。

「大地まで切り裂くとは恐れ入るよ。だが……おまえの
攻撃には大きな弱点がふたつある。ひとつは技が大味す
ぎることだ」

つまり、ある程度の出方が予想できてしまっただ。

「あとひとつは……おまえ、全然戦い慣れてないだろ。

あんな派手な攻撃ばかりじゃ、どうしても視界が遮ら
かす
る

れて敵の姿を見失う。ちよつとは考えるよな」

「ぐっ……！　そ、そんな大きな口を叩けるのも今のうちよ！　こんな魔術、私にかかれば……!?」

そこでリインの顔色がさつと青く変化した。

影の腕はわずかにもぶれることなく、彼女の首を狙い続ける。

「なんで……!?　なんでこのキモいの、消えないのよー！」
「そんなの当然だろ。なんせこいつは……おまえが消せない魔術だからだ」

「なっ……！」

「おまえが一般的な魔術を無効化できるのは、マナのバランスを乱すから。だが、この魔術はマナを必要とせず、

影さえあれば発動できる」

だからクロウはこの魔術を学んだのだ。

いつか彼女と対峙たいじしたとき、必ず仕留める切り札として。

「おとなしく降伏しろ。下手へたな動きを見せたら……容赦ようしや

はしないぞ」

「うっ、うう……！」

冷たく言い放てば、ラインの顔がますます蒼白そうはくなものとなる。

ふたりの間に沈黙が落ちる。

やがてラインの頬ほおを汗が伝つたい……その震ふるが、地面に落

ちると同時。

「こんなはずじゃ……なかつたのに！」

ラインはがくつと地面に膝をつき、はらはらと泣きはじめるのだ。

「せつかくこの時代に戻って……やっつとやり直せるって、未来を変えられるって、そう思ったのに……こんな、こんなところで終わるなんて……あんまりだわ……！」

「……うーん。やっぱりそうなるのか」

クロウはその真に迫った泣き言に首をひねるしかない。彼女の主張はやはり意味不明だ。

だがしかし、先ほどの怒りも、この涙も……なにひとつ嘘偽りのない、本物に見えるのだ。

（いやいや、そんなわけないんだけど……だってこいつ

の言うことが本当なら、俺がこの国を滅ぼしたことになるじゃねーか。心当たりなんてあるわけないし）
考えても考えても、答えは出なかった。
しかしあれこれ悩んでいるうちに――。

「ううう……むぎむぎ……この手にかかるくらいなら……いつそ！」

「あっ！こら早まるな!？」

ナイフを自身の首元に突き立てようとするリイン。
それをクロウは影の腕であわてて抑え込む。

「負けを認める潔さはけっこうだけど……まだ死なれちゃ困るんだよなあ」

「ぐっ……私を生かして、どっしよっつていっついのよ！

またこの国を滅ぼそうっていうわけ!？」

「いや、あのな……落ち着いて聞いてほしいんだけど」
慎重に言葉を選び、クロウは続ける。

「俺が知ってる未来だと……トランヴァース王国を滅ぼしたのはおまえなんだけど」

「……は？」

そこで、ラインの涙が一瞬で止まった。

「だから、聖遺物を盗んだのも、俺を過去に飛ばしたのもおまえ」

「……あなた、どこかに頭でもぶつけたの？」

「それは俺のセリフなんだよなあ……これを見ても思い出さないのか？」

「あっ、その指輪……！」

グローブを外して指輪を見せれば、リインははっと息をのんだ。

「俺は未来のおまえにこいつをもらって、この時代に戻ってきたんだぞ。覚えてないのか？」

「覚えてるもなにも……！」

彼女もまたおずおずと、自らの右手をかざしてみせる。

その人差し指の付け根には絆創膏ばんそうこうが巻かれていた。そ

れをはがせば……その下には金の指輪が燦然さんぜんと現れる。

どちらにも寸分たがわず同じものだ。彫られた細工も一致する。

「私も未来のあなたから、この指輪を渡されて、この時

代に来たんだけど……？」

「どうなつてんだ……？」

「そんなの私に聞かれても……」

しばしふたりの間に沈黙が落ちた。

やがてクロウはため息をこぼし、リインに手を差し伸べるのだ。

「とにかく俺に危害を加える意思はない。まずは一時休戦して、話し合おう」

本当なら、リインは憎い仇だ。

だが、目の前にいる彼女は……それとはちよつと違う気がする。

その違和感を解明するまでは、まともに戦うこともで

きないだろう。

「危害は加えない、ですって……？」

しかしリインは訝^{いぶか}しげに目をすがめて、クロウをにらむのだ。

「だったらあなた、なんで私の部屋にいたわけ？ 明らか
かにあれ、寝首を搔こうとしてたでしょ」

「ぐっ……！ そ、それは……そうだけど！ あのと
きと今じゃ状況が違うだろ!？」

「はぐらかさうったってそうはいかないんだから！ だ
いたい、そんなめちやくちな話を信じられるわけがな
いでしょ！ 私がこの国を滅ぼした!? そんなのまるで
身に覚えないわよ！」

「だーかーらー！ それは俺も同じなんだっての！」
結局説得は効かず、ふたりは夜空のもとでぎゃーぎゃーと叫び合う。

まるで埒らちが明かなかった。さて、どうするものかと困りあぐねたところで――。

「興味深い話だねえ。ちよつとあたしにも詳しく聞かせちゃくれないかい？」

「へ？」

「はい？」

場違いなほどに明るい声に、そろって振り返った瞬間。霧のようなガスがふたりを取り巻いて、クロウの意識はそこで途切れた。

相反する少年少女がセカイを再構築する
ヒロイックファンタジー大作



2019年2月15日頃
全国の書店さままで発売!

著：霜野おつかい／イラスト：イセ川ヤスタカ